

一書に云ふ。幸若大夫越前敦賀の山手を通行す。暮かゝりけるに、城構の様なる高き家あり。人に問へば、昔は何某とて名有る人なりといふ。幸若大夫則ち其の家に至り、一宿を乞ひけるに、許容ありて止宿しけるが、舞を一曲なしけるに、奥より四十歳許の美男の病氣の様子にて立出で、只今の一曲はそなたにて候哉。我等昔は少知の主にて候處、四五年來女の靈付添ひ病氣と成り、所領も上り此所に暮したり。今の御話を聞きて少し苦しみ止候とて、肌をぬぎ候へば、蛇脇の下にまとひ付き、頭をうなだれ居る也。幸若大夫云ふ。一曲之謠にて御苦惱穩に候はゞ、今宵何にても舞曲可仕とて、色々舞謡ひけるに、彼まとひし蛇袖の中より出で、幸若大夫の前にうなだれ、舞を聞く体なりしが、又唄舞ひければ、蛇目前に消失せたり。人々不思議の思ひをなす。主人甚だ悦び、幸若大夫翌日も逗留して居けるに、何の變事もなし。其後幸若大夫また此所を通行しけるゆゑ、有りし人の事を問ふに、其人病氣快復して都へ上られしとて、彼家跡のみ残りしと也。とあり。按ずるに、上古以來音楽舞曲の奇特によりて怨靈をしりぞけ、鬼神を

感ぜしむる世に多し。幸若舞の奇特といふべし。

○座頭橋

金澤橋梁記に、座頭橋池の小路に有之。とあり。従前は此の橋邊に盲人數名居住せり。故に橋名に呼びそめたるならん。今は此の橋名絶えたり。此の橋は倉月用水川に架けたり。

○菊池氏下邸跡

此の地は、池の小路の奥にて、従前は菊池氏の家士僅に爰に居住す。故に菊池家中と呼べり。按ずるに、延寶の金澤圖に、菊池彌八郎・菊池十六郎の兩名を記載して、下屋舗とは記載せず。

○廣岡山王道

中橋より平岡野神社への道路也。此の神社古名廣岡山神社と稱せしゆゑ、此の道路をかく呼べり。今は日吉町と稱す。

○平岡野神社

舊名を廣岡の山王社と稱し、廣岡村等此の地邊四百餘戸の産土神也。従前は眞言宗顯證院別當にて世々奉仕せし處、神佛混淆御廢止に付き、明治元年十二月別當復飾し、本地

佛像等を取除け、廣岡日吉社と改稱ありて、五年十一月村社に列せられ、七年六月更に平岡野神社と改稱を命ぜられたり。抑、當社は甚だ舊社なりといへども、舊記・縁起傳來せず。社記に、延曆年中叡山の法師此の地に勸請すと記載するのみにて、草創等の來歴詳かならず。大日本史に、壽永二年五月。木曾義仲逐北至加賀。陣于平丘野。木立林中有一古祠云々。とあり。是即ち此の神社也。源平盛衰記には、木立林と申して、中に一の板堂ありと載せたり。三州志・隼餘考にも、彼の古祠は是今廣岡の社なるべし。此の社は鎮座千年に及ぶといへり。今社藏に元應元年の眞蹟一卷あり。贋作のものに非ず。舊社の一證となすべしといへり。漸得雜記に載せたる寶永三年の廣岡山王略記に、如左記載す。

當社廣岡山王權現は、昔江州叡嶽の神鎮座ありし明年、則二十一社の上の七社を請せしとなり。或は傳ふ。廿一社を三所に頒ちて、其一所なりと。蓋其年曆は延曆の頃にして、星霜算を経る事凡九百載に餘れり。其中間或は興り或は廢す。又聖蘭と云ひし上人、再び其學をなして、神徳又新な

り。嘗て尊氏將軍、僧の賢觀をして願書を奉じ、愛染明王の塔婆の圖繪一鋪を寄せらる。鐵塔愛染といへり。常の像とはことなり、則今重器として、彼願書と共に傳ふ。此所往昔は平岡野といへり。方三里松を圍んで封境とせるとなり。今の太守前黃門尊公改之、廣岡と稱せよとの給ふと村翁傳へいへり。八・九十年以前一中と云ひし人あり。社の傾き柱の朽つるを歎きて、破れたるを補ひ、倒るゝに培ひてより、今に神座を安じ、法燈を挑げて、國家の依怙とし、君民の護持となれり。豈容易からんや。縁記不詳、略して緒し、疑しきを闕而已。

寶永三年三月日 顯 證 院

尊氏公願書之寫

奉圖繪・愛染明王塔婆一鋪。

志趣者沙彌賢觀并女大施

主。同源高氏御息災延命。

增長福壽。殊今度御上洛

安穩泰平故也。

元應元年七月十一日